

培してゐるものの圖であるが、*A. chinensis* は北支那に普通のもので私も佐藤潤平氏より送つてもらつた標品を持つてゐる。この根が蒼朮である。河北、山西、陝西、山東、江蘇、湖北等に産すと趙氏は書いてゐる。

茅朮といふのがある。これは非常に残念なことに圖が入つてゐない。趙氏は亦屬於蒼朮之一なんて書いてゐるが別の物らしい。地下莖は長 4-6 cm. 徑 1.2-1.7 cm. 作幾分念珠狀縱橫錯走之根莖；外面呈黑褐色而微蒼、堅小而有結節、有時帶捲曲之福根、短小而硬脆。橫切面爲不齊之圓形或橢圓形、全面近乎純白、分布灰褐色及至赤褐色之小斑點（精油貯蓄器）、放置一二日、即有白色結晶性之粉雪析出、北産者不能也；皮部之厚、約 1-2 mm. 皮部與木部、現褐色之圖帶極明。餘同上とある。これは江蘇茅山産品とある。LING 氏が鑑定してゐるんだから *Atractylodes chinensis* に似たものだらうが實はこれが *Atractylis lancea* であるてな事にならぬともかぎらぬ。茅朮の原植物形態を抜き書する。葉單出者居多、亦有 3 裂者、花大部白色、花頭較小、圓筒狀或鐘狀、羽狀、總苞片、短於花冠、藥離生。これだけでは同定は難かしい。

4) 祁州藥誌圖版 2. 關蒼朮 *Atractylis lyrata* SIEB. et ZUCC. とあるものは私は *Atractylodes japonica* KOMZ. と考へる、*Atractylodes lyrata* が何であるかは別に記したからこゝでは略する。

要するに *Atractylodes ovata* *At. lancea* の原産地は未だ確言は出来ぬが大體見當はつて來た様に思ふ。*Atractylodes macrocephala* の原産地は浙江である様だ。將來支那の植物が多數我が國にもたらされ又我が植物學者も實地について採集し研究すれば *Atractylodes* 屬も明かるくなるだろうと思ふ。終りにのぞみ小生研究の基礎をなす *Atractylodes* 各種の原品の圖を拜見させて下さつた小泉先生、並びに祁州藥誌を小生に下さつた濱田秀男博士に深謝する。

紀伊山脈東部植物區系

小泉源一

紀勢和半島中部に東西に亘る中央構造線の代表たる紀ノ川、橿田川以南の紀伊山脈は玖摩關東太古山系の山脈にして、紀伊、大和、伊勢、志摩四國の山地を成す、此の紀伊山脈東部とは橿田川流域以南の山地にして伊勢灣に對し志摩伊勢の半島狀の地域で紀州は北牟婁郡のみを包括する。

本地域の植物自然群落は人工による伐採破壊甚しく殊に舊藩時代より尾鷲方面は土井八郎兵衛一族の殖林作業の爲め全く自然状態は破壊されてある、然れども本地域には古來我國最大の神宮神域あるのみならず、神宮所屬の別宮、攝社、末社、所管社

等甚多く諸處に散在し、各大小種々の神域ありて古來の社叢が保存せらるゝを以て稍固有の自然状態をうかゞひ得るもの少からず。

伊勢神宮神域は神苑につゞきて神路山、島路山の廣大なる山地あるを以て、皆人は此大なる神域は古來釜斧の入らざる原生林にして、實に森嚴の極みをなすが如く思つて居るけれども、又實際然るべきであるのに、原生林の面影の存する如きものは殆ど二ヶ處の小面積に過ぎず、大部分は甚人工の加れる失望落膽の恐れ多い神林である、されば先に原敬氏が、かつて内宮參詣の折に、五十鈴川の清流水涸れんとするが如きを見て神路島路の兩御料林をば神域林に編入せしが如く、此御料林時代に當事者の所置宜しきを缺きしにや古來の原生林状のものに大なる人工をば加へしのみならず、神域に近き此御料林内に殖民をすゝめしかば、今以て所もあらふに、神宮神域内諸處に農民の土地ありて田畑を耕がしつゝあり、之等の耕作は五十鈴川の清流を汚がしつゝあるは當然にて誠に恐懼の極みと云ふべし。

予思ふに伊勢兩宮神域林の如きは、世に云ふ史蹟名勝天然紀念物を超絶せるものにして神聖冒すべからざる神林なれば、決して之に何等の森林作業等の施す如きは勿論、一指も觸るべきものに非らず、唯萬民が神聖視しつゝ後世に傳ふべきものである。神林を自然に放置するとシヒ、ミミズバイの林になると云ひし者あるが、天然は決して然簡単なものではない。

我國の林學は唯伐る事と殖へる事のみを教へて、我國家學術上、彼此の森林は伐るを得るか否かの事は教へない、如此ならば將來我日本臣民の子孫は植物に關する學問などはできなくなる、自分の子孫の事を考へぬやうな國民は將來の事知るべきである。

同地方は日本南灣外帶の中部なるを以て櫛田川を越ゆれば直に、俄かに襲速紀要素、玖摩關東要素、中部支那要素が吾人の目に映ずる事著甚である、即ち前者にはオンツ、ヂ、ズキナノキ、カイナンサラサドウタン、ソハヤキイカリサウ (*Epimedium multifoliolatum* KOIDZ. n. sp. *E. macranthum* MORR. et DECNE. affinis sed foliolis numerosis differt)、ケイピラン、アワモリシヤウマ、カウヤグミ、ハルノタムラサウ、スマカカウジュ、アサマリンドウ、ユキワリイチゲ、キリシマエビネ、センダイサウあり、中者にはドウダン、ヒメレンゲあり、後者にはケイノキを第一とし、ヒメシヤラ、イハナンテン、ナンテン、クサヤツデ、テイシヤウサウ、ユクノキ、チヤボホト、ギス、リンボク、バクチノキ、ナニワイバラ等あり、就中ケイノキ (*Loropetalum chinense* Oliv.) は支那中南部の岩山に多けれども、本邦にては西南日本外帶の山地にかゝる特別なる岩石地の山も少いので僅かに巖山の峯岩上に残れるが、昔は遙に今よりも多かりし事は地元の杣夫が特にウミシバと呼び、古老は昔伐採して薪炭として上等なるを

物語るにても知るべし、本植物は神宮植物を調査せし牧野、本田、三木の諸氏皆之を知らずして大井次三郎氏により指適せられたり。

目下此地方にて特産と稱すべきものは、イスズグミ、キシウツ、チ (*Rhododendron sikokianum* MAK. var. *nudistemon* KOIDZ. n. rar. A typo recedit staminibus laevibus glabris.) キシウバライチゴ、ジングウツ、チ、キノクニシホギク、イハナンキンナ、カマド、ジングウタツナミ、ミツデイハガサ、アサクマシノ、ヒメオタフクササ等である。

本地域は平地及低山地に於て氣候温暖にして本邦暖帯南部に位し、宮川は唯一の大河にして東西に流れ、其北側に迷岳山脈、南側には大河内山脈、朝熊山脈連互し南北兩山脈は大台山脈によりて結ばれ、最高點大台ケ原山は 1695 m あり、本地域は本邦有數第一の多雨地にして雨量 2500 耗より大台原山を中心として三千耗以上に達す、然して年平均温度亦攝氏 14.5 以上なるを以て植物の繁茂著しく、若し人工の加はるなかりせば其植物光景は如何なりしか想像するに餘りあり。

本暖帯林を構成する主要なる要素は、クスノキ、シヒ類、カン類、イチビガシ、ラガタマノキ、ヤマモガシ、ミ、ズバイ、タイミンタチバナ、コバンモチ、シチアクチ、イヌガシ、カンザブラフノキ、ヤマビハ、バリバリノキ、ミサヲノキ、カゴカシ、カクレミノ、トキハカキ、イヌグス、マンリヤウ、クチナシ、テンダイウヤク、センリヤウ、ガンピ、コガンピ、ルリミノキ、マテバシヒ、タラエフ、クロガネモチ、ホルトノキ、カラタチバナ、シロバイ、サザンクワ、ヒ、ラキ、モチノキ、クロバイ、ヤマモ、タブノキ、カナメモチ、ユヅリハ、マルバノコンロンクワ、ツゲモチ、ユスノキ、ヤブニツケイ、フユサンセウ、アサマツゲ、コセウノキ、等の常緑木本と、之に混ずる落葉木本の主要なるはアカメヤナギ、ヒメシヤラ、タマミヅキ、ハゼノキ、カンコノキ、ヒトツバハギ、ゴンズイ、ムクロヂ、ヒロハクマヤナギ、イ、ギリ等にして、藤本にはフウトウカヅラ、アマヅル、ホウライカヅラ、カギカヅラ、ハスノハカヅラ、シタキサウ、オホイタビ、ヒメイタビ、ムベ、オホバウマノスマクサ、ホウロクイチゴ、オホフユイチゴ等あり、針葉樹はナギ、カヤ、イヌマキ、あり。

草本の著しきものはオホハヒミヅ、ナベワリ、ハナメウガ、ボウラン、ハグロサウ、イヌシヤウマ、イナモリサウ、ヒナノシヤクジヤウ、スマダイコン、ホンゴウソウ等なるが羊齒類は殊に暖帯分子著しく、ナンカクラン、マツバラ等羊齒植物の他にリウビンタイン、クサマルハチ、ミツナガシハ、を始めとしホウノカハシダ、ヌリワラビ、ヒロハアツイタ、イハヤナギシダ、キクシノブ、アツイタ、コガネシノブ、オホバアマクサシダ、アマクサシダ、マツザカシダ、ヒメカナワラビ、ホソバカナワラビ、クリハラン、オホキヂノヲ、コンダ、ウラジロ、ナチクジヤク、スヂヒトツバ、クルマンダ、ハヤマンダ、アミシダ、カウザキシダ等最著し。

海濱の植物群落に於て海岸林を成すものはウバメガシ著しきも本植物は海岸のみならず遙に内陸の方にも多し、其他の海岸木本はハマユフ、ピラフドムラサキシキブ、ナンバンキフヂ、ハマヒサカキ、マルバシヤリンバイ、ハマクサギ、トベラ、ヒメユヅリハ、ハマゴウ等にして、ハマヂンチャウも一株あれども之は人爲によるものゝ如し、海岸砂地群落を成すものは、キノクニシホギク、アシタバ、ハマグルマ、ハマナタマメ、ツルナ、ハマオモト、ハギクサウ、ハマダイコン、アゼトウナ、ツハブキ、ハマボツス、タチウスギスマメノオゴケ、キノクニスゲ、ピラフドテンツキ、ハマエンドウ等である。

山地植物帯に於ては、暖帯林は 900-1000 m に終りて落葉闊葉樹林となり最高點大台原山 (1695 m) の頂上に達す、其主要なる要素はブナ、イヌブナ、トチ、ヒメシヤラ、ハハソ、アカシデ、タムシバ、シロヤシホ、コハクウンボク、ミヅメ、リヤウブ、オホイタヤメイゲツ、ヒテウチハ、オホウラジロノキにして之に混する針葉樹は下方にツガ、トガサハラ、カウヤマキ、上方にニツカウモミ、トラノヲモミ、ゴヤウマツ、あり、樹下にはハスノハイチゴ、ミカヘリサウ、ヒメバライチゴ、スマタケ、草本にはカンスケ、ユキサハ、ジヤカウサウ、バイケイサウ、タマカラマツ、上方にシモツケサウ、マイヅルサウ、イハサクラ、ヤマトササあり、大台原山の頂上にはシラベ、トウヒの小林ありて下木にはオホバメギ、ホソバツルツゲ、オホカメノキ、オホヤマレンゲ等主要なるものあり、又落葉樹林の樹上には往々ツリシユスラン、オホクボシダの着生するを見るべし、大台原山頂上附近の岩生群落を成すものはコモノギク、ヒメノガリヤス、ウテフラン、タカネヌカボ、ヒカゲツ、ヂ、ノギラン、ギンロバイ、タウキ、ミツデイハガサ、オホミネコザクラ、イハギク、ミヤマタヌキラン、コイハカガミ、イハキンバイ、ダイモンヂサウ、オホシバスケ、ヒメツゲ、イハナンテン、イハヒバ、ノクワンザウ等である。

抄 録

北村四郎氏：——日本菊科植物誌前篇(京都帝國大學理學部紀要, B. 第十三卷, 1937)

本編は日本群島、樺太、千島、朝鮮、琉球、臺灣の菊科管狀花亞科(薊族、旋覆花族、蘭草族、馬蘭族)の分類學的及分布的研究なり。

菊科植物は顯花植物中、最種類に富み、北半球にては同顯花植物の畧一割を占む、我日本も亦如此し、1784年以來内外諸學者により頗る多數の種類發表されしが、次第に分類の統一を缺き、不完全品の記載は分類に大なる齟齬を來たし、同物異名少からず。菊科植物の中には腊葉室の標品のみにては其形態、生態の不明なるもの多く、